



ある日のふれあい喫茶で

会長 高岡保宏 (S37)



老人会の仲間入りをして数年になる。近頃、婦人部有志の皆さんが、ボランティア活動で月に一回のふれあい喫茶を開催している。私は毎回それに参加している常連の一人になっている。

老人会の集まりだから、当然、話題は決まって健康のことで、どこの病院へ行っているとか、どんな薬を飲んでいるとか、自分の健康法はこうだとかの話になる。ところが今回はどうしたとかか。

編集発行人
高岡保宏
白鷺教育会事務所
姫路市飾磨区
清水2丁目128
(姫路市教育会館内)
☎(079)233-0892

最近の風潮として、簡単に人を殺めてしまう人命の軽視について、何故こうなったのか、いろいろな意見が出た。

原因を学校教育のせいにする者、

家庭教育のせいに
する者に
分かれた
が、家庭
に問題あ
りとする
者が多か
ったのが
少し意外



「石佛たちの願いは」 永瀆 満 (遺作)

だった。若い世代であれば恐らくその反対だったと思う。年配者だけに、よく世間が見えているなと感じた。

私はいつも孫、子が来ると仏壇で手を合わせることをさせている。先祖を敬う心を大事に育てているつもりだ。幼少の頃から先祖に手を合わせる子は、絶対人を殺めたりはしないと聞いている。これは私の寺の住職のうけうりである。

また、こんな例を話した。NHK教育テレビの「歎異抄を読み解く」という番組で、司会をして

いる伊集院光氏が言ったことが非常に印象に残っていると。「自分は絶対に握り飯を土

足で踏みつけることはできない」「やれと言われてもできない」というのである。実は私もこの話を聞きながら、そうだ、私も全くできない。同感だと思った。

ところで「皆さんはどうですか」と聞くと、殆ど出来ないという。では平気でできる者はいらぬのだろうかという、若者の中にはいるという。この違いはなんだろうかということになり、いろいろな意見が出た。

若者だけを悪者にしてよいのだろうか。むしろ、その親が問題だろう。その親を育てたのは誰だ。我々年配のものが、自分の子どもをしっかり育てたのだろうかを問われる。我々年配者の責任だとするならば、一体どうすればいいのだろうか。今更自分の子どもにどうできるものでもない。孫に関わっていくしかない。猫かわいがりではなく、親に代わってしっかりつけていこうではないか。ということ解散となった。